

暴走プロポーズは極甘仕立て

### プロローグ 出会はシンデレラ

小さい頃、シンデレラのお話が大好きだった。

魔法使いの力を借りて、王子様と運命的な出会いを果たした少女が、その王子様と永遠の愛を誓う。私も大人になったら、そんな恋をするのだと憧れていた。

でもね、二十三歳になった今の私は、知っているんだ。

憧れていたシンデレラのお話は絵本の中だけのもので、普通の女の子にガラスの靴を出してくれる魔法は現実には存在しない。だいたい、小さい頃に両親の怒涛どとうの離婚劇を目の当たりまにした私には、永遠の愛がそんなに簡単に手に入るものじゃないってわかっている。

それでも今、大理石の階段で、彼と出会った私は、ついシンデレラのことを考えてしまう。

彼女は、王子様がガラスの靴を手掛かりに自分を探しているって聞いた時、彼こそが運命の相手だっけ気付いていたのかな？

きつと気付いていたよね。だってそれが、運命の恋だったんだから。

じゃあ私は？

「彼」の手にはガラスの靴ならぬ私の革のパンプス。あのパンプスを拾ってくれた「彼」に、私は運命を感じているのかな？

◇ ◇ ◇

「えっと……」

高級ホテルにある、赤い絨毯の敷かれた大理石の階段。

その踊り場で、ワンピースの裾を花のように広げて座り込む桜庭彩香。彼女は眼下の光景に頬を引きつけていた。

緩やかなカーブを描いた階段の下。そこから見上げてくる彼の視線が痛い。

「……」

後ろに流した少し癖のあるチョコレートブラウンの髪に、すつと通った鼻筋と彫りの深い端正な顔立ち。全体的に柔和な雰囲気だが、目元はそれと相反するように鋭い。

手摺越しにそんな彼を見下ろしていると、豹のような、しなやかな獣を連想してしまう。思わず見惚れずにはいられない。

——すごくハンサムな人。モデルみたい。

長い手足や姿勢の良さを引き立てるスーツを纏い、片方のパンプスを手にしたその姿は、子供の頃大好きだったお伽噺の王子様をも思い出させる。

——……って、今はそれどころじゃなかった。

つい先ほど、馴れないパンプスで階段を駆け下りていた彩香は、踊り場のカーブを上手く曲がることができずに転んでしまった。その拍子に脱げた左のパンプスが、ちょうど階段を上ってきた彼の顔に直撃してしまったのだ。それこそありがちなコントのように。

「ごめんなさい。怪我とかしてないですか？」

「ああ……」

階段下の彼は、パンプスがぶつかった額を指で確認しながら答えた。

「よかった。急いで逃げていたら階段を踏みはずしちゃって……。貴方に怪我がなくてよかったです」

「逃げていた？」

ホッと息を吐く彩香を見て、階段下の彼が怪訝そうに呟く。

その言葉に、彩香は自分の置かれた状況を思い出した。

「はい。伯母に騙されてこのホテルに連れてこられたんですけど、実は目的は私のお見合いだったんです。それでこのままお見合いすると、その相手と強制的に結婚させられちゃうんです」

「そうなんだ。……それは気の毒だね」

低く落ち着いた彼の声が、広く緩やかな階段に響いた。彩香は「本当に最悪な状況です」と困った表情を見せる。

「……そういうわけですので、その靴を返していただけますか？」

彩香は、階段の手摺子の隙間から手を差し伸べた。

階段下の彼は、そんな彩香とパンプスを見比べてから、そっと口角を持ち上げる。完璧としか表現できない爽やかな微笑。

彩香は頬が熱くなるのを感じつつもホッと安堵の息を吐いた。

——よかった。怒ってないみたい。

が、次の瞬間、彼の発した言葉に耳を疑う。

「面倒くさいから嫌だね」

「え？」

「そこまで階段を上るのが面倒くさい」

「えっ？ だって、この階段を上ってくる途中でしたよね？」

そのついでにパンプスを返してください——そんないたってシンプルなお願いを断られる理由がわからない。

——やっぱり、顔にパンプスをぶつけたことを怒っているのかな？

どう謝れば許してくれるだろうかと悩んでいると、彼が軽く右手を上げる。

「まあ、そんなわけだ。申し訳ないが、君の願いは聞けない」

彼は「ごめんね」と上辺だけの謝罪を口にする、気紛れな猫のような悪戯っぽい微笑を残して回れ右をする。そして、そのまま階段を下りていった。

「えっ！ ちょっと待ってください。私の靴っ！」

「ああ……」

足を止めた彼が、軽く背中を反らして彩香を見上げた。さすがに持ち去るのはマズイと気付いたのか、彼は手の中のパンプスと彩香を見比べると、次に階段の壁に設えられたニッチへと視線を向けた。結婚式などにも利用される高級ホテルだけあって、階段脇に飾る花にもさりげないこだわりが感じられる。白い大きな花器に飾られている花は、派手ではないが質と量ともに手抜きのない物だ。

その花器に彼が歩み寄る。そして背伸びをすると、花と一緒に活けられていた細い枝の先端に、パンプスを引っ掛けた。

「君の靴は、ここに預けておくよ」

「えっ！ ちょっと……っ」

ここからだとな彼の正確な身長はわからないけれど、一五〇センチ台の彩香より高いことは確かだ。そんな彼が背伸びをして引っ掛けたパンプスなど、回収できるわけがない。

焦る彩香に、彼はまた悪戯な微笑を浮かべてみせる。こんな場面にもかかわらず、その微笑は隙がなく完璧だ。それが無性に腹立たしい。

「じゃあね、バイバイ」

彼は再び右手を軽く上げると、今度こそ階段を下りていってしまった。

「ちょっと待ってくださいっ！」

彩香はそう叫んだものの、不意に聞こえてきた「彩香、どこにいるの？」という声にビクリッと肩を跳ねさせた。上の階から誰かの足音が近付いてくる。

——最悪だ……

彩香は、額を押さえてため息を吐いた。

「彩香、そこにいたの？」

見上げると、上の階の手摺から身を乗り出している伯母の麻里子と目が合った。

「伯母さん……」

「そんなところで、なにしているの？ 探したのよ」

「えっと……散歩……」

この状況では、もはや逃げようがない。彩香は諦めのため息を吐いて、駆け足で階段を下りてくる麻里子に手を振ってみせた。

## 1 階段下の王子様

彩香の勤め先であるフラワーショップ『ブラン・レーヌ』は、高級ブランドの直営店が立ち並ぶ地域にある。ケヤキ並木の有名な大通りを離れ、少し奥まった路地にあるそのお店は、オーナーの尾関玲緒のこだわりにより、パリの街角をモチーフにした店構えになっていた。

常緑樹の鉢植えが並ぶテラコッタタイルの軒先の奥には、白い漆喰塗りの壁に囲まれた空間。そこに、淡い色調の花が溢れんばかりに並べられている。

「で、昨日のお見合いはどうだったの？」

オーナーの玲緒が、薔薇を片手に彩香に問いかけてくる。ふわふわとしたピンク色の花びらが幾重にも重なるその薔薇は、クイーン・アンという品種だ。

「ああ……お見合いですか」

白いシャツに黒いタイトスカート、その上に深緑のエプロンという、店のユニフォームに身を包んだ彩香は、顔をしかめながら美しい雇い主に視線を返した。

玲緒の身なりはいたってシンプル。グロスとアイラインと眉墨のみのメイクに、長いストレートの黒髪はバレッタでお団子状に纏めただけ。

それだけなのに、十分大人の魅力を醸し出した美人に見えるのだからズルイ、と彩香は思う。

対する彩香は、二十三歳にもかかわらず十代に見られる童顔。その上、今、思い切り不細工な表情をしている。そんな彩香に、玲緒は小さく笑って言った。

「なによその顔。せっかくの定休日、『玲緒さん、どうしよう。伯母さんに騙されました！ このままじゃお見合いさせられて結婚することになってしまいます！』なんてメールをもらったんだから、その顛末を聞く権利はあると思うわよ。気になってしょうがないから、思わずワインをボトル一本空けちゃったじゃない」

——それは玲緒さんのいつもの休日の過ごし方です。っていうかメールとワイン、全然関係ないし。

視線でそう突っ込みを入れると同時に、昨日の一件を思い出してしまい、彩香はさらに不細工な

顔をする。

「色んな意味で、最悪でした」

棘のある声で答えた彩香は、声とは裏腹の優しい手つきで薔薇の変色した葉を摘まんでいく。

「なにがどう最悪なのよ？ 本当に強引に結婚させられるの？ 相手はデブでハゲなオヤジとか？ 結婚するなら仕事はどうする気？ 辞めるなら早めに教えてよ。……あ、あと、わかっていると思うけど、結婚式のブーケは持ち込み料金払ってでもウチで注文してよ」

親しい友達には『オレ様・玲緒様・女王様』と揶揄される雇い主の矢継ぎ早な質問に、彩香は項垂れる。

シンデレラの舞踏会とまではいかないけれど、お洒落をして、高級ホテルのレストランでディナーを楽しんだ後はバレエの観劇——という伯母の計画を聞いて、束の間のお姫様気分を味わっていた。だけどそれは、ホテルに入るまでのこと。まさかそれが全て、彩香を釣るための餌だとは思わなかった。

「……本当に、最悪だったんです」

「だから、ちゃんと説明しなさいよ」

自分を睨む玲緒の視線に、彩香は昨日の出来事を順序立てて話し始めた。



全ては、伯母である麻里子にバレエの観劇に誘われたことから始まる。

なんでも、海外で有名なバレエ団の公演チケットを奇跡的に入手できたのだが、一緒に行くはずの友達にドタキャンされたのだという。せっかくのチケットを無駄にしたくないので、付き合ってくれるならお礼に高級ホテルでの夕飯をご馳走することだった。

ちょうど公演日はお店の定休日だったし、なにかと口うるさい兄の一郎も出張のため留守なのでゆつくり羽が伸ばせそうだと、彩香は一緒に行くことにした。

すると麻里子が、せっかくだからお洒落をして出かけようと言って、彩香に可愛いワンピースとパンプス、それに秋ということで、上に羽織る暖かなシヨールもプレゼントしてくれた。

そして当日は必ず、美容院で髪の設定とメイクをしてくるようにと言いつけたのだった。

——今思えば、最初から怪しかったんだよね。

一郎の留守を見計らったような誘い。麻里子からの服一式のプレゼント。美容院で髪の設定やメイクをした上での、高級ホテルの食事……

その流れに、もう少し疑いを持つべきだったのかもしれない。けれど彩香が、これが全て伯母の企みであることに気付いたのは、レストランのある高級ホテルに着いてからだだった。

そこで麻里子が約束の時間までまだ間があると言ったので、彩香は『少しその辺を散歩してく』と伝えて麻里子から離れた。そうして真っ直ぐにパウダールームに向かう。普段履くことのない高いヒールで歩いて疲れたので、一旦脱いで休みたい——パンプスの贈り主である伯母にそう訴えることもできず、散歩という建前でこっそりパウダールームに逃げ込んだというわけだ。

さすが高級ホテル。トイレに併設されているパウダールームは、鏡が大きく、他の人の視線が気にならないようにと一つ一つのブースを低めのパーテーションで仕切っている。

彩香は一番奥のブースに入って椅子に座ると、すぐにパンプスを脱ぎ、行儀が悪いと思いつつも片足を座面に持ち上げて揉み始めた。

そうして足をマッサージしているうちに、彩香はふとあることに気付く。

——あれ、伯母さん、さっき『約束の時間』って言っていた？

レストランの予約の時間のことを『約束の時間』と表現するだろうか？ それに麻里子は、このホテルに着いてからやたらとキョロキョロして、まるで誰かを探しているようだった。

「……あれ？」

なにかがおかしい。彩香が思いを巡らせていると、パウダールームに誰かが入ってくる音がした。行儀の悪い恰好をしていた彩香は、思わず気配を押し殺す。そのまま息を潜めてみると、誰かの話し声が聞こえてきた。

「ああ、敏夫。……うん、今ホテル」

——伯母さんが、お父さんに電話している？

父親の名前を出した伯母の声に、彩香は耳を澄ました。麻里子は、彩香に気付くことなく話を続ける。

「先方はまだ来ていないみたい。……彩香？ 大丈夫よ。これが自分のお見合いだって、ちっとも気付いていないようよ」

それを聞いて彩香は目を丸くした。

——お見合い？ これってお見合いだったの？

「え？ 騙しているみたいで可哀想？ なにを言っているの」

麻里子が強い口調で、「そんなこと言っていると、彩香は一郎のせいで生涯独身なんてことになるかねないのよ」と窘める。

「冷静に考えてみなさい。一郎のシスコンをこのままにしていると思う？ 確かに、まだ彩香が小さいうちに親が離婚したのは可哀想だと思うわ。責任感の強い一郎が彩香を溺愛して、過保護になる気持ちもわかる。……でもそのせいで彩香は、二十三歳になった今でも、恋人どころか男友達の一人もいないのよ」

敏夫が納得したのか、麻里子が「ね、そうでしょ」と力強く言う。

——……まったくその通り。

彩香もまた、四つ年上の兄、一郎を思い出して静かに頷く。

実のところ、一郎の彩香に対する態度は「口うるさい」なんてものではない。「過保護」——それも上に「超」が三つほど付いているもおおしくないレベルのものなのだ。

「彩香も人見知りなどところがあるし、なんだかんだ言ってもお兄ちゃんっ子だから、一郎にベッタリで恋人を作る気配もないでしょ？」

——私がお兄ちゃんっ子だったのは、子供の頃の話です。

彩香はそう叫びたいのを必死に堪えた。

確かに両親が離婚して父親に引き取られた時、まだ幼稚園児だった彩香にとって小学生の兄一郎は頼もしい存在だった。一郎もまた、自立心も責任感も人一倍強い子供だったため、自分より小さな彩香が寂しい思いをしないようにといつも気遣ってくれていた。毎朝、彩香の長い髪を綺麗に編み込んで幼稚園に送り出していたのは一郎だし、夜、寝る前に絵本を読み聞かせていたのも一郎だ。それに彩香がイジメツ子に意地悪されそうになると、どこからともなく駆けつけて庇ってくれた。そんな一郎は、幼い彩香にとってヒーロー的な存在だった。

仕事忙しい父敏夫も、一郎が献身的に彩香の面倒を見てくれたことで、ずいぶん助けられたはずだ。麻里子の手助けもあったとはいえ、一郎がいなければ育児をしつつ仕事をこなすのは難しかっただろう。

——それはわかってるんだけどね……

何事にも限度と潮時が必要であると、彩香は肩を落として天井を見上げる。

兄の生真面目さと責任感の強さは、彼の長所であると同時に、短所でもあると彩香は思う。

幼い頃は単に日常の世話や怪我・イジメの心配だけだったものが、彩香が年頃になると、悪い男に言い寄られないかと心配し始め、彩香の周囲の男子に常に目を光らせるようになったのだ。

「あの子は、過保護すぎるのよ。小学校はもちろん、中学校高校時代も、愉快な子分たちを使って彩香を監視していたんでしょ？」

麻里子が『愉快な子分たち』と表現したのは、一郎と同じ剣道道場に通う後輩門下生のことだ。

幼い頃から剣道道場に通っていた一郎は、持ち前の生真面目さで鍛錬を重ね、学生時代は剣道の

全国大会で優勝したこともある。当然、そんな彼を尊敬する後輩は多い。

その崇拜ぶりと言ったらさまざま、一郎に『俺の可愛い妹に変な虫がつかないように見守ってほしい』と頼まれたら、馬鹿正直にそれを完遂しようとするほど。そんな彼らは、まさに『愉快な子分たち』という表現されるにふさわしい。

四つ年上の一郎が、中学校高校と、彩香と入れ違いに卒業してしまっても、その後輩たちが目を光らせ、彩香の周囲に気を配る。廊下ですれ違いざまに肩が当たっただけの男子にも駆け寄って注意をし、食堂で隣の席に座っただけの男子にも鬼の形相で威嚇する。そんな彩香と積極的に関わっていたがる男子などいるわけがない。

——あんな状況で、男友達を作るなんて無理よ。

もちろん彩香としても、一郎にあんな迷惑なボディーガードはいらないと何度も訴えた。しかし、『俺が妹を守る』という一郎の確固たる信念のもとでは、なかなか改善は見られなかった。

愉快な子分たちにボディーガードを止めるよう直訴したこともあったが、親分の一郎がそんな感じだから、彼らがその訴えを聞き入れるはずもない。

一応、精一杯の妥協策として、ある程度離れたところから彩香を見守ってくれるようになったのだが、その分彩香を見守る表情が一層鋭くなってしまった。ガタイのいい強面の男子が遠くから睨みを利かせる姿は、それはそれで恐ろしく、彩香の周りの男子が及び腰になるのも仕方ないことだった。

そのおかげで彩香は、小学校から高校まで、ろくに男子と口をきくこともなく過ごす羽目になっ



てしまった。短大は女子校だったし、就職したお店は玲緒と二人で切り盛りしているので、この歳になるまで男性と交際することなく生きてきた。

「今だってそうよ。一郎だったら、業務時間に融通が利く外資系の会社に勤めているのいいことに、自分の休みを彩香に合わせて、彩香の外出にもちよくちよくついて回ってる。このままじゃ彩香は恋の一つもすることなく、処女のままお婆ちゃんになっちゃうわよ。……それに一郎だって、彩香を構うのに必死で、恋人を作る気配もないじゃない。このままじゃ二人とも生涯恋人を作ることなく歳を取って、アンタは孫の顔を見ることなく死んでいくのよ」

次第に麻里子の口調に熱が入ってくる。

「そんなことになったら、誰が桜庭家の仏壇やお墓を供養するのよっ！ 私だって死んだら、一郎とその子供に供養してもらおうつもりなんだから。死んでまで主人と一緒に墓なんて嫌よ。ちゃんと一郎を結婚させて、内孫作ってもらってよ」

——伯母さん……

どうやら伯母夫婦の仲が芳しくないというのは本当らしい。仏壇やお墓の供養のために、伯母に処女うんぬんの心配までされたくはないが、確かにこのままではまずいことはわかる。

電話の向こうの敏夫も、同じような気持ちなのだろう。麻里子が「そうでしょ」と自信満々な様子で話を続けている。

「でも別の考え方をすれば、そんな一郎のことですもの。結婚して子供さえできれば、いい父親になると思わない？ そうでしょ？ あの子は、溺愛する対象さえ間違わなければ、いい夫、いい父

親になれるんだから」

うんうんと聞き耳を立てて頷いていた彩香は、麻里子の「そのためには、まず彩香から片付けなきゃいけないのよ」という言葉に動きを止めた。

——なんでお兄ちゃんの恋愛事情に、私の名前が出てくるのよ……

彩香の疑問に答えるように、麻里子が言葉を続ける。

「彩香が結婚でもすれば、一郎だって構うのを諦めるわよ。そうすれば他の人に関心を持つようになって、恋愛や結婚へと話が進むわ。……そう思っていた矢先に、今回のお見合い話っ！」

声だけで、麻里子が気合いを入れて握りこぶしを作ったのがわかる。

ここまで話を聞いて、彩香はようやく、自分のお見合いとやらが一郎のシスコン病を治すために仕組まれたものであることを理解した。

「なんだか事情はよくわからないけれど、先方のご家族が、息子さんの結婚を焦っているらしいの。どんな相手でもいいから、とにかく息子さんを結婚させたいって話なのよ。……そうなのよ。そんな人なの。……彩香にはちょうどいい話だと思っ」

声が大きくなっていったことに気付いたのか、途中麻里子の声が周囲を憚るように小さくなる。それを聞きつつ、彩香は冗談じゃないと背筋を伸ばした。

家族が焦って相手を探さなきゃいけない男なんて、ろくでもない男に決まっている。

——私にだって、結婚相手に求める条件があるんだから。

今まで恋愛したことはないけれど……違う、恋愛したことがないからこそ、お伽噺にあるような

素敵な恋というものに憧れてしまう。結婚するのであれば、素敵な恋愛をした相手とでなきゃ嫌だ。彩香は足を床に下ろし、気配を押し殺してパンプスを履き直した。

麻里子が「とにかく私に任せて。絶対に彩香を結婚させるから」と電話を切り、パウダールームを出ていく。それから数分おいて、彩香もそつとパウダールームを抜け出した。

「いくらお兄ちゃんのシスコンを治すためでも、そんな男の人との結婚なんて冗談じゃないわ」

そう呟きつつ首を横に振った彩香は、エレベーターホールに立つ麻里子に気付かれないように、少し離れた階段へと向かったのだ。

そして急いで階段を下りている最中に足を踏み外し、その拍子に脱げたパンプスが、階段を上ってきた彼の顔を直撃。あの、色んな意味で記憶に残る出会いへと繋がったのだ。



——あんな意地悪な人に、一瞬でもときめいた自分に腹が立つっ！

彩香の脱げてしまったパンプスを拾い、高い場所に引っ掛けて立ち去った王子様。

あの時のことを思い出し、彩香はまた憤慨する。ちなみに例のパンプスだが、小柄な麻里子と自分ではどうすることもできずに、ホテルのボーイを呼んで取ってもらう羽目になった。その間、伯母に何故こんなことになったのかとしつこく聞かれて、大変な思いをしたのだ。

「ふうん。確か、そういうお伽噺あったわよね。……王子様が、お姫様を天女の国に帰したくな

くて、彼女が階段で落とした羽衣を隠しちゃうのよね」

「玲緒さん、それ『シンデレラ』と『天女の羽衣』が混ざっていますよ」

訂正する彩香に構わず、玲緒が「彩香好みの出会いじゃない」と言っ、からかいの視線を向けてくる。その言葉に、彩香は露骨に顔をしかめた。

「どこがですかっ！」

「だってアナタ、お伽噺の王子様みたいな人と運命的な恋がしたいって話していたでしょ」

「それと今回のことは色々かけ離れています。あんな意地悪な人、私の理想の王子様じゃありません。顔にパンプスをぶつけたことで怒っていたとしても、あんな意地悪しなくてもいいのに。」

「それは残念。で、そのお見合いの結果はどうだったの？」

「ああ……。それが、相手にドタキャンされて、お見合い自体がなかったことになりました。報告が遅くなってすみません」

その後約束のレストランで、お見合い相手が来るのを待っている間に玲緒へ泣きのメールを送ったのだが、お見合いをドタキャンされた安堵感から結末を報告するのを忘れていた。

ペコリと頭を下げる彩香に、玲緒がクイーン・アンに鼻を寄せて笑う。この可愛らしい薔薇は彼女のお気に入りなのだ。

「じゃあやっぱり、運命の相手は階段下の王子様ってことになるんじゃない？」

「なんでそうなるんですか。別に、急いで運命の相手を探す必要はないんですよ」

「あら、急がないと駄目よ。あんな地獄の番犬みたいなお兄ちゃんがいるんですもの。今のうちか

ら全力で運命の人を探しておかないと、本当に処女のまま出家することになるわよ」

生涯処女を貫く予定も、出家する予定もない。でもあの兄がいる限り、完全には否定できないのが怖い。彩香は「冗談はその程度にしてください」と、レジカウンター後ろに並ぶラッピング用品の在庫確認を始めた。

「ねえ、その階段下の王子様って、どんな感じだったの？ 時々ウチに花を買いに来るバカ旦那みたいな感じ？」

まだ話を終わらせる気がない玲緒の言葉に、彩香は時々ブラン・レーヌを訪れる一人の客の姿を思い浮かべた。何者なのかはわからないけれど、いつもお洒落な装いで店を訪れ、高価な花束を注文し、そのついでといった感じで玲緒を食事に誘う男性がいる。年齢は三十歳前後、髪を明るいうちに染め、流行りの服を着て、眉も綺麗に整えた、いわゆるチャラ男である。

領収書を切ったことはないので勤める会社などはわからないけれど、花束に添えるメッセージカードから、名前は永棟颯太だということはわかっている。玲緒は、お金持ちで遊び馴れた感のある彼を『若旦那』ならぬ『バカ旦那』と呼んでいるけれど。

「お客様にそのあだ名は、どうかと思えますけど……」

そう窺ってはみたものの、見るからに裕福そうな身なりに、注文する花束の金額、そしていつも花を送る女性の名前が違うことを考えると、確かにピッタリなあだ名とも言える。

彩香は苦笑いを浮かべながら「年齢は同じくらいだと思いますけど、もっと落ち着いた感じのハンサムでした」と答えた。

「彫りの深い顔立ちに切れ長の目、体も引き締まった感じで、細身のスーツが似合っていました。あれであんなに意地悪じゃなきゃ、本当に理想の王子様だったのに」

彩香は、二度と会わないであろう彼の姿を思い出しながらそう話す。その口調が残念そうな響きを帯びていることには気付かない。

「ふくん。それって、あんな感じ？」

「え？」

振り向くと、玲緒が入り口の扉の方を指さしている。

彩香もそちらに視線を向けると、バカ旦那こと永棟颯太が、扉のノブに手を掛けているのが見えた。彼はそのまま、後ろに向かつてなにか話している。

……………？

彩香のいる位置からはちょうど死角になっていて、彼の後ろの人物が見えない。彩香が思わずカウンターに両手をつけて身を乗り出すと、同じタイミングで、颯太が扉を開けて店に入ってきた。

「あっ！」

颯太に続いて店に入ってきた男性の姿に驚き、彩香はその姿勢のまま硬直してしまった。

——なんで彼がここに……？

それはまさに昨日、彩香がパンプスを顔にぶつけた『階段下の王子様』だった。その彼が、昨日同様仕立てのいい細身のスーツに身を包み、店の入り口に立っている。

カウンターの上で硬直している彩香に、颯太が人懐っこい笑顔で挨拶する。

「お久しぶり」

「いらつしやいませ……」

颯太はすぐに玲緒に視線を向けた。

「玲緒さん、僕に会えなくて寂しかった？」

「いえ、全然」

相変わらずな台詞せりふをのたまう颯太に、玲緒は冷やかに答える。それでも営業用スマイルだけは忘れないので、颯太は「今日もクールビューティーだね」と喜んでいる。

いつものように軽い挨拶を済ませた颯太は、ちらりと彩香を見ると、「今日は彼の付き添いで来たんだ」と言って立ち位置をずらし、背後に立つ王子様に道を譲ゆずる。

——付き添いってことは、彼はただのお客様として花を買いに来ている？

——昨日の今日で、こんな偶然の再会なんてある？

姿勢を直すタイミングを完全に失っている彩香に、階段下の王子様が歩み寄る。

——もしかして、昨日のことで文句を言いに来たのかな？

そう思うには、無理がある。颯太とこの王子様が知り合いたったとしても、あの時パンプスをつけた犯人とブラン・レーヌの彩香を結び付けられるわけがない。

——じゃあ、やっぱりこれはただの偶然？

——それなら、私に気付かないかな？

昨日は、美容院で完璧なメイクをしてもらっていたし、普段はハーフアップにしている髪もきち

んとアップにしていた。彩香はなんとか体勢を戻し、試しに声のトーンを下げて話しかけてみる。

「ど……どういった物を、お求めでしょうか？」

「あれ……」

階段下の王子様が、口元に手を添えて考え込む。そして「声、そんなに低かった？」と問いかけてきた。

——うっ……。昨日のこと覚えてる。

ということはやはり、苦情を言いに来たのだろうか。でもどんな奇跡が重なれば、彼がここに辿たどり着くのかわからない。

「あのっ……コホンッ」

彩香は咳払いして、「どういった物をお求めでしょうか？」と地声で聞き直した。下手な芝居をした分、余計に気まづくなっただかもしれない。

「ああ、そうだ……」

本来の用事を思い出したのか、階段下の王子様がパチンッと指を鳴らした。そしてその指を、彩香の鼻先に向けてくる。

寄り目になって指先を確認する彩香に、彼は悪戯いたずらな微笑を浮かべて言った。

「俺のお求め品は、君だよ」

「はい？」

「君が欲しい」

階段下の王子様が、そう断言して満足げに頷く。

「え？ ええええーっ!？」

意味がわからない。彩香は、とりあえずカウンタールから一步離れる。

しかし、王子様は彩香から指を外さない。

「面倒くさいから、何度も言わせないでほしい。どうだろう、俺と結婚してみないか？」

「はい〜い？」

彩香の悲鳴にも似た驚きの声に、颯太が声を出して笑う。

「おい、潤君。……そんなロマンスの欠片もないプロポーズじゃ、女の子の心は動かせないよ」

潤君と呼ばれた王子様が、不満げに眉を寄せる。

「ロマンス？ そんな面倒くさいもの、必要ないだろう」

「じゃあ、結婚できなくていいの？」

「いや。できれば結婚はしたい」

——これは、なんのドッキリですか？

意味不明のプロポーズに戸惑う彩香は、もしかして玲緒が颯太と組んで仕掛けたドッキリなのだろうかと、二人の方を窺う。こちらを見守りながらさりげなく肩を触ろうとする颯太の手を玲緒が素早く叩いている。その様子を見る限り、二人が手を組むとはとても思えない。

ただおろおろしていると、その姿が面白かったのか、颯太が爆笑する。そしてひとしきり笑った後で、目元の涙を拭いながら彩香に向き直った。

「まあ立ち話もなんだから、落ち着いた場所で潤君……久松潤斗のプロポーズを聞いてあげてよ」

「えっと……」

まったく理解が追いつかず、断る理由が見つけれられない。彩香は、戸惑いながらもとりあえず頷いた。



ブラン・レーヌは、颯太が花を全部買い取ることを条件に本日は閉店。十数分後、彩香はユニフォーム姿のまま、玲緒と一緒に店の近くにあるカフェにいた。彩香と玲緒が並んで座るテーブルの向かいに、階段下の王子様こと潤斗と、友人である颯太が並んで座っている。

「まずは自己紹介から始めようか。……僕は、永棟颯太。まあ、時々お店を利用させてもらっているから、名前は知っているよね。それで……」

颯太に促された潤斗は、無言のままスーツの内ポケットから名刺入れを取り出し、彩香と玲緒の前に一枚ずつ名刺を置いた。

「株式会社ヒサマツモーター……専務取締役、久松潤斗」

名刺を読み上げる玲緒に、潤斗が頷いてみせる。

ヒサマツモーターといえば、国内外で知られている大手自動車メーカーだ。戦時中の軍用機開発を足掛かりに、戦後の復興期に低コストな自動二輪車の大量生産に成功したことで一気に飛躍した

会社である——とテレビの特集かなにかで見ることがある。

そうでなくともヒサマツモーターの自動車のCMは、毎日、どこかのチャンネルで見かけている。「以前御社の新車プレゼンの際に、当店が会場の花のレイアウトを担当させていただいたことがあります」

ブラン・レーヌのオーナーとして一礼する玲緒に対し、潤斗は興味なさそうに肩をすくめた。

大手企業の重役ともなれば、イベントで利用する花屋の選定にまで関わることはないだろうから、どう答えればいいのかわからないのかもしれない。

彩香は、「ああ、そんな仕事させてもらったことあったな」などと一年ほど前に受けた仕事を思い出しながら、改めて潤斗を見た。

目の前に座る潤斗は、何度見ても思わず見惚れるほどに端正な顔立ちをしている。鼻が高く、切れ長の目をした彼の顔は、ギリシャ彫刻を思い出させる。ギリシャ彫刻に魂を吹き込んだらこんな感じになるのかもしれない。

ふと、潤斗が彩香の視線に気付いて悪戯な微笑を浮かべた。そしてすぐに視線を逸らして気だるげに髪を撫でる。

一瞬だけ見せた潤斗の微笑が、彩香の心をそわそわさせる。

こんなに素敵で、超有名企業の専務をしている彼が、何故自分にプロポーズしてくるのだろうか。潤斗が、その理由を説明する気配はない。

「こら、面倒くさがつてないで喋れっ！ それだけの説明じゃいくら待っても返事はもらえないよ」

そんな潤斗に、颯太が突っ込みを入れる。その間も、テーブルの上の紙にペンを走らせる手を止めない。そこに書かれているのは、幾人もの女性の名前。

店の花を全て買い取ることを提案したのは颯太だが、対する玲緒は『特に用途がないのなら花は売らない』と意見した。そんな玲緒の意向に沿うべく、先ほどから颯太は買った花を送る女性のリスト作りに忙しい。

一方、突っ込まれた潤斗は、渋々といった感じで口を開く。

「名前と肩書、自己紹介のために必要なものは提示した。その肩書から、おおよその収入も想像がつくはずだ。……あ、あと年齢は二十九歳」

——いえ、肩書がすぎすぎて、収入なんて想像もつきません。

心の中で突っ込む彩香に代わり、忙しく手を動かす颯太が「それじゃあ理解できないって」と言って情報を補足してくれる。

「彼、久松潤斗はヒサマツモーターの社長の息子で、仕事はかなりできるよ。……まあ、仕事嫌いで遊ぶことしか能のないバカ息子だとしても、この歳で既に一生遊んで暮らせるだけの個人資産は持っているからね。収入の心配はしなくていいと思うけど」

「遊ぶことしか能のないバカ息子はお前だろう」

詳しい自己紹介を颯太に丸投げした潤斗だったが、そこだけは無視できなかったのか、すかさず口を挟んだ。そんな潤斗に、颯太は胸を張って見せる。

「失礼だな。僕は本当に遊ぶことが仕事だから」

颯太は実家がかんりの資産家らしく、所有している賃貸マンションやテナントの管理を任されているものの、その実これと言った仕事はないのだ——と説明した。それを聞いて『だからバカ旦那になったのか』と彩香と玲緒は内心納得する。

すると、潤斗が小さく咳払いをして口を開いた。

「まあそういうわけで、俺との結婚を検討してもらえないだろうか？」

言葉こそ下手だが、どこか高圧的な物言い。彩香は肩を落として息を吐く。

「なんでそうなるんですか？」

そういうわけもなにも、どういうわけなのかがさっぱりわからない。

「俺が、一人息子だから……かな？」

——駄目だ、論点を変えよう。

彩香はこめかみを指で押さえながら、再び問いかける。

「じゃあ、プロポーズの相手がどうして私なんですか？ 久松さん、私のことにも知らないですよね？」

すると、潤斗は形の良い切れ長の目を細め、勝ち誇った表情を見せる。その不遜とも言える表情に、彩香は不思議と頬が熱くなるのを感じた。

他の人がこんな表情をすれば不愉快に思うかもしれないけれど、潤斗のそれはひどく魅力的だ。——けど、だからって恋愛や結婚の対象に考えるのは無理！

昨日の階段での一件を思い出して、彩香は心の中で舌を出す。

見た目が素敵だからって、素敵な結婚ができるわけじゃないことは、彩香にだってわかる。

潤斗はそんな彩香の胸の内も知らず、つらつらと話し始めた。

「名前は桜庭彩香。年齢、二十三歳。幼稚園の時に両親が離婚したため、父子家庭で育ち、現在は父と兄との三人暮らし。勤め先はそちらの尾関さんが経営するフラワーショップ。中学高校を通して美術部に所属しており、趣味は手先の器用さを活かした手芸……」

「えっ！……も、もしかしてストーカー？」

羅列される自分の情報に、彩香は思いつ切り引いてしまう。

だがそう考えれば、昨日一度会っただけの彼がこの場にいることにも納得がいく。もしかしたら昨日の階段での出会いも、自分を尾行してのことだったのかもしれない。

——こんな美形でもストーカーになるなんて……世の中って怖い。

動揺する彩香に、潤斗は冷やかな視線を向けて言い放つ。

「誰がそんな面倒くさいことを。誤解がないように言っておくけど、俺は、人や物に執着するなんて面倒くさいことは、絶対にしない。だからストーカーなんかには、なるわけがない」

どーんと効果音でも聞こえてきそうなほどに毅然とした態度を取る潤斗。

——その理由は、そんなに偉そうに言うことですか!?

彩香が呆れていると、颯太がペンを持ったまま控えめに拍手をする。

「いよっ。さすがは、ヒサマツモーターのものぐさ王子。容姿端麗で資産家、しかも頭脳明晰ときているのに、道理で結婚できないわけだ」

潤斗は、冗談めかして囁し立てる颯太を睨む。颯太は「本当のことだろ」と反省する様子もなくおどけた表情で彩香に話しかける。

「あのね、彩香ちゃん。君、お見合い相手にすっぱかされたでしょ？ その相手がこの久松潤斗だったんだよ」

「え、ええっ!?」

——彼が、親に結婚相手を探してもらっていたお見合い相手!?

さりげなく『ちゃん』付けされたことなどどうでもよくなる爆弾発言。彩香は目眩がしてくる。

「なんか昨日は色々面倒くさくなって、途中で引き返してきたんだって」

それから颯太は、「コイツ、極度のものぐさなんだ」と続ける。

「え？ ああ……」

ようやく納得できる話が出てきて、彩香はなんとか頷いて見せる。

確かに昨日、階段を上るのをやめた時に『面倒くさくなった』と言っていた。

「なんで昨日お見合いを断った相手に、今日プロポーズする気になったの?」

玲緒が質問する。そう言えば、と彩香も不思議に思っただけだ。

すると潤斗は「その表現には、語弊がある」と眉を軽く上げて、また悪戯な微笑を浮かべた。

「昨日は断ったのではなく、面倒くさくなったからすっぱかしたただけだ。そして今日になって結婚を申し込む気になったのは、よくよく考えればこれ以上見合いを重ねること自体、面倒くさくなっただけだからだ」

「はい……?」

説得力のあるような、ないような理屈に、彩香はぼかんとする。

「我が社は、代々本家の長男が社長に就任することが慣例となっている。そのため、最近次期社長である俺に対し、周囲からの『結婚しろ』『次の後継者をもうけろ』とのプレッシャーが尋常ではなくなってきた」

「はあ……」

「両親も周囲に煽られたのか、今までは仕事さえこなしていればなんにも言っていなかったのに、この頃やたらと俺に見合いをさせたがる。後継者の件はともかく、とりあえず結婚を考えろと」

潤斗は、その様子を思い出したのか「本当に面倒くさい」と呟き、話を続ける。

「恋愛も面倒くさい。結婚も面倒くさい。誰かと一緒に暮らすのも面倒くさい。……それでも久松家長男の義務を果たすために、誰かと見合い結婚をするべきだと思う」

「はあ……」

——なんなの、その中途半端な責任感。

内心呆れる彩香に、潤斗は「そうは思うのだが、正直、その見合いさえ面倒くさい」と深いため息を吐き、眉間を指で押さえた。そしてすぐにその指を彩香に向ける。

「だから君で手を打とうと思ったのだが、どうだろうか?」

……『だから』の意味はわかった。昨日は面倒くさくてお見合いをすっぱかした相手に、今日はお見合い自体が面倒くさくなったからプロポーズ。



わかったけれど、こんなプロポーズあり得ない。あり得なさすぎて、言葉が出てこない。

彩香は口をパクパクさせた。

お見合い結婚を否定する気はない。が、彩香が懂れているのは恋愛結婚だ。もしお見合いで知り合った相手と結婚するのだとしても、お互いの愛情を確認した上で結婚したい。

「俺の肩書は、この名刺に書いてある通り。情報が足りないようだったら、ネット検索でもすれば経済誌に掲載された情報が出てくると思う。俺から君に聞きたいことはない。別に、君に興味や好意を持っているわけじゃないから」

「……」

「俺と結婚する際の君のメリットは、経済的に安定することと、生涯浮気や離婚の心配がないことだと思う。浮気や離婚なんて面倒なことは、絶対にしない自信はある。俺のメリットは、これで周囲に結婚を催促さいそくされずに済むこと」

「……」

簡条書きのように続く潤斗の言葉に彩香が目丸くしていると、颯太が笑う。

「クツ……ククツ……。マジにあり得ないでしょ？ 潤君、面白すぎ」

そして彩香に「こんなプロポーズも斬新ざんしんつて言えば斬新だし、いいと思うけど？ どうかかな？」と問いかけて、止まっていた手を動かす。まだリスト作りは終わらないようだ。

想像もしていなかった展開に一時停止していた彩香の頭が、再び動き始める。

「冗談じゃないですっ！」

彩香は、テーブルを叩いて声を荒らげた。その振動で、彩香の前に置かれていたカップから紅茶が跳ねて、クロスに茶色い染みを作る。突然の大声に、店に居合わせた他の客まで彩香たちに視線を向けてくる。

それに気付いた彩香は声のトーンを下げて、「恋って、もっとロマンティックに始めるものです」と呟つぶやいた。

そんな彩香に、潤斗が淡々と返してくる。

「君は大きな誤解をしている。言っておくが、俺は君と恋を始めたわけではない。ただ結婚における互いの条件とメリットを照らし合わせて、上手くかみ合うようなら結婚してもらえないだろうかと、交渉しているだけだ」

「交渉って……」

「これは交渉であって、恋愛じゃない。だから君が無理して俺を愛する必要もなければ、俺が君を愛する必要もない。だから安心するといひ」

——それこそ、胸を張って言うことか！

再び口をパクパクさせる彩香に、潤斗はあの悪戯いたづらな微笑を浮かべて見せる。その微笑みが彼の本音を隠してしまうようで、どこまで本気にしているのかわからなくなる。

「冗談はやめてください」

「本気だ。冗談を言うためだけに、こんな所まで来るはずがない」

「えっと……。それは、面倒くさいからなんですよね？」

いかにも、とばかりに無言で頷く潤斗。それを見た彩香の思考がまた停止しそうになる。ここまです堂々とされると、むしろ賞賛したくなる。

指先でこめかみを押さえる彩香を前に、潤斗はもう一枚名刺を取り出し、颯太からペンを奪って名刺の裏に数字を書き込んだ。

「これ、俺の携帯の番号。もし結婚する気になったら電話してほしい。あつ、断りの電話なら、話すのが面倒くさいから必要ない」

潤斗は颯太にペンを返しながらそう言って、伝票を片手に席を立った。

「あの……」

彩香は呆然とその背中を見送ることしかできない。

颯太も、今の今まで作っていた注文リストに素早くペンを走らせて立ち上がる。

「それ僕の番号とアドレス。残りの注文はメールでやるから、玲緒さんの携帯からメール送っていい」

颯太はそう言うと、潤斗の後を追った。

「えっと……」

玲緒は颯太が残した紙を引き寄せると、自分のスマホを取り出した。

「バカ旦那にアドレス教えるの、なんか嫌だけでしょうがないか……」

「玲緒さんのアドレス教えるんですか？」

玲緒が意味深な笑みを浮かべた。

「なんかヤツとは、今後関わりが増えそうだからね。なにせ彩香の『王子様』とお友達なんだから」

「あんな人、王子様じゃありません」

玲緒は、ムツとする彩香を鼻で笑いながらアドレスを打ち込む。それから「理想の王子様が見つかってよかったわね」と言って、彩香の胸ポケットに潤斗の携帯番号入りの名刺を滑り込ませた。

「どこがですかっ！」

「衝撃的な出会いに、突然のプロポーズ。しかも浮気の心配もないそうよ。お伽噺とげばなしのような恋の始まりの予感がするじゃない」

完全にからかいかい口調になっている玲緒に、彩香は「全然違います」とため息を吐いた。

お伽噺の王子様とお姫様の結婚に絶対不可欠な『永遠の愛』が、このプロポーズには欠けている。



カフェを出た潤斗は、そのまま近くの立体駐車場に向かった。何台かの車の中で、颯太所有のオープンカーがひときわ目立っている。

潤斗は追いかけてくる颯太が鍵を開けるのを待たず、オープンカーのドアの上に手を突き、ヒラリと体を浮かせて助手席に乗り込んだ。

「ちょっと待ってくれば、鍵開けるのに」

一足遅れて追いついた颯太が、鍵を開けて運転席に乗り込み、エンジンを掛ける。

けれど潤斗は「待つのが面倒くさい」と返して背中をシートに沈めた。

「本気で、あんなプロポーズでいいと思ってるの？」

車を発進させ、料金所で駐車料金を払いながら、颯太がからかうような視線を向けてきた。

「なにか問題でも？」

「問題だよ。本気で結婚したいのなら、もっと乙女心に配慮したプロポーズをしなきゃ」

「……乙女心？」

まるで難解な専門用語のように潤斗が繰り返すと、颯太は大きく頷く。

「そう。大事なのは乙女心。女の子にとってプロポーズは人生の一大イベントなんだから、もっとドラマチックに演出してあげなきゃ。……例えば、夜景の見える観覧車の中でのプロポーズとか」

「そんなの面倒くさい。それにそんなこととして、後で『観覧車でプロポーズなんて引く』とかSNSで呟かれたら面倒だろう」

颯太は「潤君らしい」とこっそり呟き、料金所の係員からお釣りを受け取ると、再び車を発進させる。

「でも、もし彼女と本気で結婚したいなら、そのくらいのことをすべきだったと思うよ。それに、もし彼女がそういうことをSNSで呟くタイプの子なら、今頃とつくに『プロポーズのことを』交渉」だって。引くよね』って書き込まれてるって」

「ああ、そこまでは考えてなかったな」

「でも彩香ちゃんはそんなタイプには見えないから、心配しなくても大丈夫だと思っよ。それに、彼女一人が潤君の実名出して呟いたところで、たいした問題じゃないだろうね。なんだったら、ヒ

サマツモーターの広報ですぐに対処してくれるだろうし」

「まあな」

「それより重要なのは、このままじゃ潤君は彩香ちゃんにプロポーズを断られるってことだよ。早目にチャンスを作って、もう一度プロポーズをやり直さなきゃ」

「何度もプロポーズするなんて、面倒くさいな」

——確かに彼女との見合い話は思いがけない幸運だったけれど……

心の中でこっそりそう付け足しつつ、潤斗はため息を吐いた。

そんな友人を見て、颯太は少しだけ真面目な口調で続ける。

「そんな顔するなよ。……一度断られたぐらいで諦めずに、彩香ちゃんを口説けよ。二人が仲良くなれば、それを切っ掛けに僕と玲緒さんとの距離も縮まるだろうし」

後半はいつもの軽い口調だった。潤斗は顔をしかめて、ハンドルを握る颯太を見る。

潤斗が邪険に扱っても、さして気にする様子もなく付き纏ってくる颯太。

彼との付き合いは、学生時代までさかのぼる。その期間の大半において、彼は誰かに恋をしていた。しかも複数人相手の同時進行が常だ。今は、さつき一緒にいたブラン・レーヌのオーナー、尾関玲緒に恋しているらしい。そんな彼女の店で、他の女性に贈る花束を購入しているのだから、その恋とやらには怪しいものを感じるが。

——そう言えば今回の見合いも、こいつがあオーナーと仲良くなる口実が欲しくて、俺の両親に持ちかけてきた話だったな。

いつまでも息子が結婚しないことに焦り、両親は次から次へと見合い話を持つてくる。その都度、潤斗は『面倒くさそうな女性だから無理』と断り続けていた。

そんな時に颯太が、両親と潤斗に『どんな良家の子でも潤君が断ってしまうなら、目先を変えてみれば？』と持ちかけてきた。聞けば、颯太がよく利用している花屋の店員とのことだった。

その時は興味がなかったので詳しいことは覚えていないが、彼女サイドにも結婚を焦る理由があるらしい。とはいえ、潤斗にその見合いに応じる義理はない。

渋る潤斗に、颯太は『僕のためにもぜひ』と言って、見合いの場であるホテルへの送迎まで買っ出た。その見合いは、昨日のような結果に終わったわけだが。

「しかし昨日は驚いたよ。ホテルまで送った直後に潤君から『迎えに来い』って電話が掛かってきたんだから」

苦笑いする颯太に、潤斗が大きく息を吐く。

「しよがないだろ。見合いする前に、相手がその見合いから逃走している場面に出くわしたんだから」

昨日、ホテルまで送ってもらった潤斗は、わずかに緊張していた。原因は直前まで放置していた相手の釣書。

——まさかこんな偶然があるとは。

そんなことを考えつつ階段を上っていたら、上の方で小さな悲鳴が聞こえ、誰かが転ぶ心配がした。思わず上を見上げた瞬間、額に硬い物が直撃する。

予想外の痛みに俯くと、パンプスが片方だけ落ちてるのが見えた。それを拾い上げて再び上を見れば、階段の踊り場にしゃがみ込む彼女。

潤斗も、事前に彩香の顔や名前は知っていた。けれど今の彩香は、潤斗の知る彼女より、ずっと可愛らしい。

このお見合いのために、めいっばいお洒落をしたのだろうか。……そう考えると、馴れないパンプスで階段を踏み外したという彼女の失態が微笑ましく思えた。

だから必死に謝る彼女に『気にしなくていいよ』と微笑みかけようとしたのに、彼女から聞かされたのは予想外の言葉。

『騙されて連れてこられた』『強制的に結婚』。

その上、自分との見合いを『最悪』とも言っていた。

——なんでだろう。あの瞬間のことを思い出すと、いまだにイライラする。

普段なら多少不愉快なことがあっても、深く考えるのが面倒くさいとすぐに忘れてしまうのに。今回は、昨日感じた苛立ちを今日もまだ引きずっている。

あの時も、つい腹立たしさに任せて彼女のパンプスを高い場所に引っ掛けてきてしまった。

普段の自分ならその場に置いてくるだけだったが、何故かあの時は、そんな小学生レベルの意地悪までしたのだ。

「何事にも無関心な潤君を怒らせるだけでも、彼女、なかなかの大物だよね」

颯太は、昨日の潤斗のムスツとした顔を思い出したのか、クスクス笑う。

「うるさい……」

潤斗はそれだけ言って黙り込む。

実のところ、颯太は昨日も同じことを言って笑っていた。

そして『好きと嫌いつて感情は、実はよく似ているんだよ。興味のない人には、なんの感情も持たないはずだからね。珍しく君をムカつかせた彼女と結婚しちゃえば？』と茶化<sup>ちやか</sup>してきた。その言葉に妙な説得力があったので、今日のプロポーズに至ったのだけれど。

「で、この先はどうするの？」

「どうするって……。彼女から承諾の連絡があれば結婚するし、なければこれっきりだな。とりあえずこれで、親が別の見合い話を持ってきても、当分の間『この前プロポーズした女性からの返答を待っているの』と断れるし」

「あっ！ だからさつき、断りの電話なら掛けなくていいって言ったんだ」

「さあな」

納得する颯太に、潤斗は悪戯<sup>いたづら</sup>な微笑を返した。一応、スマホの画面を確認してみるが、まだ掛かってはきていない。そんな潤斗を見て、颯太が笑う。

「じゃあきつと、彩香ちゃんから電話が掛かってくることはないね。あんなロマンスの欠片<sup>かけら</sup>もないプロポーズで、乙女心を動かせるわけがないから」

「……」

何故かムツとして無言で視線を返すと、颯太が「でも、もし奇跡的に電話が掛かってきたな

ら……」と続ける。口調がまた少し真面目になっている。

「今度はちゃんと、夜の観覧車にでも乗って、ゴンドラが頂上に差しかかった時に、彼女に跪<sup>ひざまず</sup>いてプロポーズしてごらんよ。台詞<sup>せりふ</sup>も、あんな商談みたいなのじゃ駄目だ。彼女が結婚に前向きになれるような台詞を考えるべきだね」

「跪く……」

その言葉に、子供の頃に嗜<sup>たしな</sup>んだ合気道の作法を思い出す。稽古<sup>けいこ</sup>の始まりと終わりに、必ず床に両膝を突き、正座をして神前に礼をしていた。

——プロポーズとは、それほど神聖なものだということか？

確かに、結婚式では新郎新婦が神前で誓いを立てているから、その可能性はある。

——それに前向き……？ なにか目標意識を持って、結婚に臨<sup>のぞ</sup>めばいいのか？

仕事なら、売り上げ目標を定めて実績を上げていけばいい。だけど、それを結婚に置き換えた場合、なにを目標にすればいいのかわからない。

潤斗は、答えを求めて颯太を見やる。自分が少々ズレた解釈をしていることには気付かない。

「……」

「もし僕に教えを乞<sup>こ</sup>うなら、アドバイスしてあげてもいいけど？」

認知り顔でそう微笑む颯太に、答えを求める気も消え失せる。

「別<sup>べつ</sup>にいい。どうしても、彼女と結婚したいわけではないし」

「さすがヒサマツモーターの御曹司<sup>おんそうし</sup>。人に頭を下げる習慣がないと、反応もひねくれているね。本

当は教えてほしいんじゃないの？」

潤斗は、短く口笛を吹く颯太を睨んだ。

「必要ない」

静かに顔をしかめた潤斗に、颯太がニンマリ微笑む。

「じゃあ、これからも久松家の『潤君お見合いプロジェクト』は続くんだ」

「……それも、面倒くさいな」

確かにしばらくは見合いを断れるだろうが、それだつていつかは限界が来る。そのうち、新たな理由が必要になるだろう。潤斗は大きなため息を吐くと、スマホの画面へと視線を落とす。

そして着信を告げる様子のない液晶画面に、再び深いため息を吐いた。

## 2 夜空のプロポーズ

「なんだか、大変な一日だったな……」

いつもより少し遅めの帰宅時間。彩香は、家族と暮らすマンションのエレベーターに乗り込むと、今日一日の出来事を思い出して重いため息を吐いた。

昨日の潤斗との出合いの衝撃が冷めやらぬ状態での、今日の再会。そして昨日のお見合い相手が潤斗だったという衝撃的事実に、理解不能なプロポーズ。

それだけでも十分大変だったけど、店に戻ったら戻ったで、颯太から送られてきた注文リストを見ながら、玲緒と二人で大量のフラワーボックスや花束を作ることになった。その上、急なことで配達業者に配達を頼めなかったので、玲緒と手分けしてあちこちお届けすることに。それでこんな時間になってしまったのだ。

バカ旦那の名に恥じぬ交友関係（女性限定）の広さと金の使い方——と、玲緒も感心していた。

——着替える暇もなかった……

いつもは私服で通勤しているのだけれど、今日はお届け先から直帰したためお店のユニフォームのままだ。

ふと袖口に鼻を寄せると、深い緑の匂いがした。その匂いに、彩香は愛おしそうに目を細める。小さい頃から花が好きで、花に関わる仕事に就きたいと思っていた。そんな彩香にとって今日の忙しさは心地よい。ホッと息を吐いて、自宅のある階でエレベーターを降りた。

——帰ったら、まずはお風呂に入りたいな。

——昨日はリラククス効果のあるライムフラワーの入浴剤にしたから、今日は……

入浴剤を集めるのが趣味である彩香は、その日の気分に合わせて入浴剤を選ぶ。今日の自分に最適な香りは何だろうかと思いを巡らせながら玄関の鍵を開け、そのまま扉の隙間に体を滑り込ませた。

が、次の瞬間、玄関に立ちほだかる人の姿にビクンツと後ずさる。

鬼の形相——咄嗟にその言葉が頭に浮かんだ。

玄関に立ちほだかっていたのは、兄の一郎だった。

その表情と立ち姿は、鬼とか仁王と呼んだ方がいいかもしれない。

「……お兄ちゃん、ビックリさせないでよ。出張、明日までじゃなかったの？」

「……」

彩香が、愛想笑いを浮かべて後ろ手に扉を閉める。一郎は、そんな彩香を無言で睨むだけだ。

「仕事でなにかあった？　なんか今、大変な仕事を任されているんだよね？」

いつもなら笑顔で出迎えてくれる兄の険しい表情に、嫌な予感がしてくる。

学生時代、剣道で体を鍛えてきた一郎は、そこそこ身長があり肩幅も広い。鋭い目つきに刈り上げた髪。糊のきいたワイシャツとストラックスを着て刑事だと名乗れば、信じる人も多いことだろう。

——う、気持ちで負けそうになる……

そんな一郎に見下ろされると、威圧感で息苦しくなる。

彩香はそそくさと靴を脱ぎ、頭を低くして一郎の脇をすり抜けた。

「彩香っ！」

一郎が彩香を呼び止める。怒りを押し殺したような低い声が怖い。

「なに……？」

「お前、昨日は、なにをしていた？」

——やっぱり……

良くも悪くも自分を溺愛している兄が、仕事の件で八つ当たりしてくるはずがない。だとすれば、

どこかから昨日のお見合いの件を聞きつけたのだろう。

「なにつて……、麻里子伯母さんと、食事をしにホテルに」

自分はそのつもりでホテルに行ったのだから、嘘ではない。お見合いはドタキャンされたのだから、したことはない。自分にそう言い聞かせる彩香に、一郎が「それだけか？」と訝しげな視線を向ける。

「それだけ……だよ。疑うなら伯母さんにも確認してみれば？　でも、どうして？」

「それだけのために、あんな可愛いワンピース買ったのか？　いつ買い物に行ったんだ？」

一郎の言葉に、彩香は弾かれたように振り向いた。

「——っ！　お兄ちゃん、私の部屋に入ったの？」

もういい大人なのだから、いくら家族でも留守中に勝手に部屋に入ってほしくはない。

険しい表情をする彩香に、一郎は悪びれる様子もなく答える。

「なんだ、その顔は？　お前が寂しがると思つて急いで仕事を片付けて帰ってきてやったんだぞ。……そうしたら下駄箱に見慣れないパンプスがあったから、友達が来ているのかと思つてお前の部屋を覗いただけだ」

「……」

「ちゃんとノックはしたし、部屋を覗いただけで中には入っていないぞ。……む、念のために言つておくが、お兄ちゃんは別にお前の女友達に興味があったわけじゃないぞ。ただお前に、早くお土産のお菓子を食べさせてやりたくてだな……」

なおも不満げな顔をする彩香に、一郎は『お兄ちゃんだから当然だろう』とばかりにバーンと胸を張っている。そしてやや芝居がかった様子で続けた。

「いや、お前だけでなく、お前の大事なお友達ならお兄ちゃんだつて大事におもてなしたいじゃないか。だからお前とお友達に、美味しいお菓子と紅茶でも出そうと思つてな。それで覗いてみたら、空っぽの部屋に見慣れないワンピースがあつたんだ」

「ああ……」

そう言えば麻里子に買つてもらつたパンプスは下駄箱に収めて、ワンピースはクリーニングに出すつもりで部屋の目立つ場所に掛けてあつた。

「その上、お前はなかなか帰つてこないし、もしやお兄ちゃんが数日家を空けただけで悪いムシでも付いたんじゃないかと、心配したんだぞ」

お前のせいで気苦労が絶えないと言いたげに、一郎が大きく首を振る。

「まあワンピースの件はいい。俺も最近出張が多くてお前の買い物に毎回付いていけるような状態じゃないからな。それで、今日はどうして遅かつたんだ？」

「仕事」

見たらわかるでしょ、と彩香が不満げに答えると、一郎が「うむ、それならしょうがない」と納得する。

「じゃあ、着替えて手を洗つてこい。さつき言つたお菓子、一緒に食べよう。留守番のご褒美だ」  
一転、ご機嫌になつた一郎が、彩香を追い越してリビングへと向かう。そのついでに、彩香が手

にしていた鞆かまを持ってあげることも忘れない。なんのканの言つて、寂しがつていたのは自分らしい。

——手を洗つて、お留守番のご褒美のお菓子を一緒に食べようつて……お兄ちゃん、私のことを何歳だと思つているの？

一郎の目には、彩香が小学生のままの姿で映っているのかもしれない。だから勝手に部屋を覗くし、過剰に干渉してくるのだろう。

——私、もう男の人からプロポーズされるくらいに大人なんですけど。  
そのプロポーズの相手の人間性については、この際目を瞑こむつておく。

彩香は湧き上がる反抗心を抑えて、前を歩く一郎に疑問を投げかけてみた。

「ねえ、お兄ちゃん。もし私が『実は昨日、お見合ひしていたの』つて、言つたらどうする？ しかもその相手からプロポーズされたつて言つたら……」

——少しは私のこと、大人になつたつて認めてくれる？  
そう言おうとしたら、血相を変えた一郎に遮さへられた。

「彩香っ！ お、お前、お見合ひしたのか!？」

一郎は駆け寄つて彩香の肩を掴み、「お前、いつからそんな不良になつた!？」と叫ぶ。

——なんでお見合ひを不良のカテゴリーに入れるのよ。  
そう思いつつも、想像以上の兄の喰い付きに口ごもつてしまう。

「あつ……えつと……」



『このままじゃ彩香は恋の一つもすることなく、処女のままお婆ちゃんになっちゃうわよ』  
ふと、昨日の麻里子の言葉が耳に蘇る。

——あり得る……

そう言えば、玲緒も一郎のことを『地獄の番犬』と揶揄していた。そんな危険なあだ名を持つ兄が目を光らせていては、この先も恋人を作るのは難しいだろう。彩香は気を取り直して反論する。  
「お兄ちゃん、私を何歳だと思っているの？ 私だってもう大人なんだから、恋愛や結婚を考えてもおかしくないんだからね」

「彩香にはまだ早いっ！」

「……」

——私、もう、二十三歳なんですけど。

唸る彩香に、一郎は「なんで急にそんなことを言い出すんだ。反抗期か？」と見当違いもはなはだしい見解を述べる。

「なんでそうなるのよ。子供扱いしないでって言っているだけでしょっ！ お兄ちゃんは私がこのまま生涯独身で過ごしてもいいの？」

「そっ、そこまでは言っていないだろう。ただ彩香にはまだ早いと思うだけだ」

「じゃあ、何歳になったら恋愛していいの？」

「うっ……そうだな……あと十年くらいかな？」

「……」

話にならない。十年経ったら彩香は三十過ぎだ。

一郎がこんなだから、麻里子だってあんな無茶苦茶なお見合いをセッティングしてきたのだろう。そして彩香も、一郎のせいで男性に免疫もつかずに育ってしまったから、あんなものゝさ王子にときめいたりしたのだ。

——あんな面倒くさがり屋で意地悪な人に、一瞬でも見惚れちゃったのはお兄ちゃんのせいだっ！

——お兄ちゃんがうるさく付き纏って、男の人に免疫がなかったせいだっ！

彩香の胸の内に、ふっふつと怒りが込み上げてくる。

よく考えたら、潤斗のあのロマンティックさの欠片もないプロポーズが、生まれて初めてのプロポーズだ。そしてもしかしたら、あれが生涯最後のプロポーズになるかもしれない。

「お兄ちゃんのバカっ！」

彩香の厳しい声に、一郎が大きく目を見開き、持っていた彩香の鞆を床に落とす。

そんな一郎に、彩香は「お兄ちゃんなんか、大嫌いっ！」と再び厳しい言葉をぶつける。

愛する妹からのそんな言葉だけの攻撃に、剣道の猛者として名を馳せた一郎が膝から崩れ落ちた。普段から兄の過保護さを煩わしく思うところがあっても、自分のためにしてくれているのだからと我慢していた。でも、今日という今日は我慢の限界だ。

「家出してやるっ！」

彩香はそう言い残すと、玄関に出しっぱなしだった突っかけサンダルを履いて、外へ飛び出した。

後ろで一郎が倒れ込む音が聞こえたけれど、今は心配する気になれない。

◇ ◇ ◇

「しまった。財布もスマホも家に置いてきちゃったっ！」

家を飛び出してしばらくやみくもに歩いていた彩香は、ふとそのことに気付いて眩くらいた。

冷静になって考えてみれば、財布も携帯もさつき一郎が床に落とした鞆かばんの中に入っている。

でも手ぶらだからといって、今すぐ家に帰る気にはなれない。財布にしまい忘れた小銭か電子マネーカードでも入っていないだろうか、彩香はユニフォームのポケットを探ってみる。

すると胸ポケットの中で、カード状のなにかに指先が触れた。

取り出してみると、昼間潤斗が残っていた名刺だ。

「……ああ」

そう言えば、玲緒がこのポケットに名刺を入れたのだった。

久松潤斗。

一郎の次に助けを求めたくない人の名刺に彩香は小さくアカンベをして、再びポケットを探り始めた。

◇ ◇ ◇

潤斗は、自宅マンションでパソコンを操作しながら、チラリとスマホの画面に視線を向けた。

仕事を終えて帰宅してから二時間。ジーンズに薄手のインナーとカーディガンといたいつもの部屋着で過ごしていた潤斗は、小さくため息を吐いて引き続きマウスを動かす。

「ポーンをここに……」

マウスをクリックして、想定通りの手順で対戦相手を追いつめながら、潤斗は昼間の一件を思い返す。

——電話、来るわけないか……

颯太の手前、認めるのが癪しやだったが、自分でもあのプロポーズの仕方は間違っていた気がしている。だからといって、ろくに言葉も交わしたことはない女性に、どうやって結婚を申し込めばいいのかわからない。

割とモテる方なので、交際経験はそれなりにある。でもこれまでの恋愛は全て、同じ理由で破局していた。相手から告白されて付き合うものの、やがて女性の方が、面倒くさがり屋で束縛を嫌う潤斗のペースに付き合えなくなって別れを告げる。その繰り返しだったので、自分から女性を口説くどいた経験がない。そしてここしばらくは、そんな付き合いさえも面倒くさくなって、恋愛自体